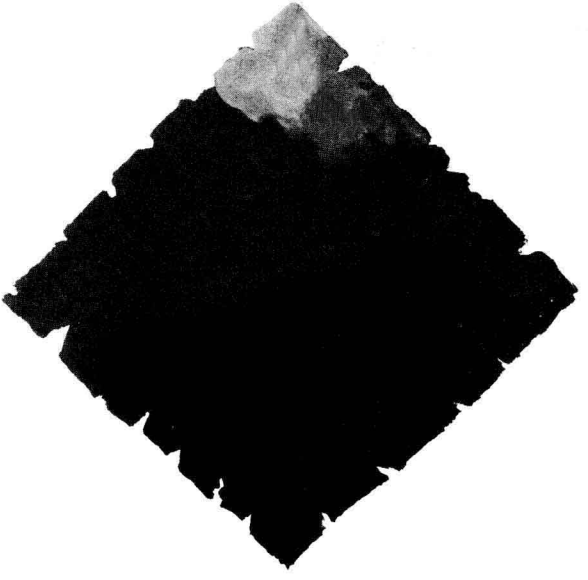
惑い

津村節子

下 巻

五木寛之



新潮社版

にっぽん三銃士（さんじゅうし） 下巻

一九七一年七月十日 発行
一九七一年八月十日 二刷
定価五〇〇円

著者 五木（いつき） 寛之（ひろゆき）
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京〇三(260)一一一一(大代)
振替東京八〇八番
（乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。）

印刷・株式会社金羊社 製本・新宿加藤製本
© Hiroyuki Itsuki 1971 Printed in Japan

にっぽん三銃士　下巻　目次

東京の空 7
風立ちぬ 37
花も嵐も 73
大陰謀 90
別れの曲 102
新たなる出発 114

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

長崎ばってん　130
おろろん子守唄　161
仮装舞踏会　176
笑いガスの怪　194
夜明けの出発　221
終りなき旅　235

裝幀　村上　豊

にっぽん三銃士　下巻

東京の空

一郎はぼんやりと空を眺めながらマリの現われるのを待っていた。博多港はようやく暮れ方の薄紫の色に包まれはじめている。海からの重い粘つく風が、一郎の長髪を乱して吹きすぎた。

〈マリのやつ、おそいなあ〉

お新姐さんの家には、このところ玄海共闘の連中が絶えずつめかけていて、マリとゆっくり話をする機会がない。まして二人で寄りそって甘い囁きをかわすことなど全く不可能だった。

そこで一郎とマリは、港の倉庫のたち並ぶあたりで短い逢引を計画したのである。マリは生活費を稼ぐ目的もあって、アルバイト先の酒場へ、その後もずっと通っているのだった。

一郎が三本目の煙草を吸い終って海に投げた時、ようやくマリがタクシーでやってきた。

「おそいなあ」

「ごめんなさい」

マリは素直に謝って、

「重大ニュースよ。東京から例の調査を頼んでたお友達がやってきたの。お金持ちの娘なんで、飛行機でわざわざ報告にやってきたんだわ。その子と喋ってたんでおそくなっちゃったの。怒らないでね」

「怒ってやしないさ」

一郎はマリと肩を並べて黒い海を眺めながら、ゆっくりと倉庫の前を歩いて行った。

「おれ、実は今、そのことをちらっと考えてたところさ」

「そのことって？」

「東京の、お袋のこと」

「もうママって言わなくなったのね、あなた」

「え？」

マリは微笑して、

「だって一郎さん、いつもお母様のことをママ、ママって言ってたじゃない。いい青年が変だなあ、って本当はおかしかったわ。でもいつの間にかオフクロ、と、ちゃんと自然に発言するようになったわね。たくましくなった感じよ」

「そうか」

一郎は苦笑して石ころを海に向って蹴とばした。

「それで？」

「一郎さんのお母様、どうしてらっしゃると思う？」
「さあ」
「偉いもんねえ、女って」
マリはなかば自嘲的に、一郎に向って言った。
「あなたが行方不明になって、しばらくは大変かなしんでらしたそうだけど――」
「今はちがうのかい」
「ええ。なんでも最近あたらしく出来た銀座のホスト・クラブにすっかり夢中なんですって」
「ホスト・クラブ？」
「知ってるでしょう、あのハンサムな男性が中年のご婦人のお相手をする女性専用クラブよ。一郎さんのお母さまは、そのホスト・クラブに一日にあげず通ってらっしゃるんですって」
マリは一郎の表情をうかがいながら、そっと彼の腕に手をからませた。
「お袋がホスト・クラブにねえ」
一郎は憮然とした表情で首をふった。
「おれはてっきりこっちのことを心配したあげくにノイローゼにでもなってるんだろうと思ってたよ」
「それが大笑い」
マリは言ってから、あわてて、大違い、と訂正した。
「なにしろ、こんなパンタロンはいて、髪なんて凄い色に染めてらっしゃるんですって。それで外車のスポーツカーか何かに乗ってクラブへ乗りつけるそうよ。あたしの友達はまるで二十代のタレントさんかと思ったらしいわ」
「まさか」
「本当よ」
「うちのお袋が車を運転するなんて信じられないね。第一、免許だって――」
「赤坂の教習所に通ってちゃんと免許を取ったんですって」
「驚いたなあ」
「女ってそんなものよ」
マリは大人っぽい、どこかニヒルな口調で呟いた。
「あんなに男の子みたいだったあたしが、こんなにおしとやかに変っちゃったんですもの」
「おれの母親がホスト・クラブにねえ」
一郎は呟くように言って立止り、空を見あげた。
「なんだか変な気がするなあ。これまでお袋を女として考えたことが全くなかったもんだから」
「子供の目からはそうでしょうね」
「まあ、それはいいとして、お袋、べつに病気とか、事故にあったとか、何か困ってるとか、そんなことはないのかな」
「そのお友達の話だと、なんだか家庭電器メーカーの株でえらくお稼ぎになったらしいわ。そんな才能もおありにな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ったのね、あなたのお母様って」
「冗談だろう」
一郎は笑って、
「なにしろ、お袋ときたら百円以上の計算は自分じゃできない女なんだぜ」
「じゃあ、一郎さんがお母様の目の前から姿を消したことで、きっと本来の才能に目覚められたんだわ、きっと」
「信じられない」
一郎は立止るとマリの肩に手をのせて言った。
「その君の友達とかいう子、ほかに何をしらせにきてくれたんだ」
「黒田さんのご家族のことと、八木修さんのお家のこと。それからキキのことや、あなたのフィアンセのことなんか、全部くわーしくね」
「彼女どうしたって？」
「あなたのフィアンセのお嬢さん、スカウトされてアングラ劇団の女優さんになってるそうよ。ヌードで舞台に立って、凄い人気なんですって」
「……」
「キキのお店は最近さっぱりらしいわ。そのうち閉めちゃうんじゃないかしら。いい人なのにね」
一郎は東京の方角を眺め、頭の中で〈新宿〉と呟いた。熱いものがこみあげてくる感じがあった。

その週の土曜の夕方、一郎は独りで福岡空港の日航のカウンターの前に立っていた。
東京行の便は、すでに再終便まで満席である。土曜の分だけでなく、日曜もすでに予約でぎっしりらしく、いきなりカウンターで切符を買おうという虫のいい客など、ウェイティングの客の群れから冷笑されてこそこそ姿を消して行く有様なのだ。
「なにがなんでも六時迄に東京へ着かんと大変なことになるんですけど」
カウンターの係員に哀願している中年の婦人がいる。
「申訳ございません。とにかくこの土、日はよほど前からご予約なさいませんと」
「どうしても駄目ですの」
「はあ」
「じゃあ、ウェイティングの申込みを」
「空席待ちのほうも、もう先着五十名様もいらっしゃって無理ですね」
「まあ。もっと飛行機を増やせないのかしら」
「あいすみません」
「失礼しちゃうわ。どうしてくれるのよ」
なかにはテレビ映画のスターらしき青年が女の子を口説いている姿もある。

「ねえ、リハーサルの時間に間に合わないと困っちゃうんだ。きみ、なんとかならない？」
「なりませんねえ」
「そこんとこをさ、頼むよ、きみ」
「はい、そちらのお客様、どうぞ」
一郎はそんな客たちを面白そうに眺めて立っていた。彼のポケットには、今日の東京行のチケットが三枚、ちゃんとおさまっているのだ。一枚は自分のための切符である。
東京のことが気になりだすと、矢もたてもたまらず、ちょっとだけでもいいから新宿や銀座の空気が吸ってみたくなったのだ。母親の様子を陰ながら眺めてきたいという気持もあった。そこで黒田忠吾や八木修には内緒で、東京行のチケットを早目に買い込んでおいたのだ。
東京まで一万四千円。
高いとは思うが、なにしろ一時間数十分でひと飛びの便利さは金にかえがたい有難味がある。客が殺到するのも無理はない。
三枚買ったのには訳があった。自分の名前で一枚、他の二枚はヤマダナギサ、と、イノウエイサム、の名前で買ってある。資金はボタ山お万から利息先払いで借りたのだ。
立っている一郎のそばを、顔色変えた大男が駆け抜けて行った。大きなカバンを抱え、カウンターに衝突せんばかりの勢いで走って行くと、係りの青年を相手に目の色をかえて何か押問答している。
〈きたな〉
カウンターの中の青年は、事務的な表情で首を振っている。それでもあきらめずに、大男は粘っていたが、やがて額に青筋を立てながらもどってきた。カバンを床に放り出し、腕組みして天をあおいで長嘆息する。
一郎はゆっくりその男のそばへ近づいて行くと、微笑をうかべて軽く大男の肩を叩いた。
「失礼ですが」
大男は険しい目で一郎を見返した。
一郎は相手のうさん臭そうな目つきにかまわず、気楽な調子で話しかけた。
「乗れそうですか。混みますねえ」
「……」
「東京までいらっしゃるんでしょう？」
「そうだ」
「お急ぎのようですね」
「いや、なに、こんなに混むとは思わなかったんでな。カウンターで切符を買うつもりじゃったが、てんで問題にならん。臨時便を飛ばすべきだよ、航空会社は。え？　そうだろ？」
「そうですね」
「大体だな、これだけ乗客があふれてるんだから、もっと

席を増やしゃいいじゃないか。こっちは立ち席でもいいからと……」
「ジェット機に立ち席は無理でしょう」
「無理じゃないさ、君。カニだのフグだの、そんなものを航空便に乗せる余裕があるんなら、立ち席を増やせばいい。たかが一時間ちょっとだろ。週刊誌読んでりゃすぐつくじゃないの」
「曲り角では揺れますからご注意ねがいまーす、とスチュワーデスに言わせるか」
「冗談じゃないよ。今夜中に東京につけないと、二千万円の商談がふいになるんだ。二千万円だぞ、君」
「二千万円！」
「そうとも。この商品見本をバイヤーに見せる約束を反古にしちまうと、他の業者に横取りされる事はわかっている。大損害だよ」
「全日空や他の飛行機も当ってみましたか」
「全部だめだとさ。畜生！」
　一郎は大男の充血した目を優しく見つめて、
「お気の毒ですなあ。なんとかしましょうか」
「え？」
「お力になってさしあげてもいいんですよ」
「なんとかするって、どういうことかね」
「ぼくの切符をおゆずりしてもいいんですがね」
「本当か、君！」
　大男は飛び上らんばかりに狂喜すると、一郎の首筋をグローブのような手でしめあげた。
「痛い。放してください。声がでないじゃありませんか」
「すまん、すまん」
「ところで、二千万の損害とおっしゃいましたね」
「そうだ」
「では、このぼくの東京行の次の便をおゆずりすれば、いくら出します？」
「え？」
「東京まで片道一万四千円、これは原価です。おゆずりするのは、それにいくらかプラス・アルファがないと——」
「なんだ君は！」
　大男は額に青筋を立てて、
「きみは人の弱味につけ込んで闇商売をする気か！」
「いやならやめます。これはぼくの好意のつもりですがね。ぼくはこの切符をおゆずりして、列車で上京します。そのための日当を出してくださいと言ってるだけですから」
「うーむ」
「三万円でどうです」
　一郎は指を三本立ててニッコリ笑った。
「三万円！」
　大男は図体に似合わぬ悲鳴をあげて、

「そんな無茶な。それじゃまるで泥棒だ。二倍以上じゃないか」
「ぼくは売込みをやってるわけじゃないんでして」
一郎はいんぎんに一礼して男のそばを立ち去ろうとした。相手はあわてて一郎の上衣の袖をつかむと、切符は欲しいが余分の金を出すのは惜しいといった複雑な表情で、
「君、こっちは切符がいらんと言ってるわけじゃない。ただ、いかにも高いと瞬間ちょっと感じただけだよ。その三万円という値段はなんとか——」
「なりませんねえ」
「実は私はねえ、君、中小企業の中でもまさに小の下に属する会社の経営者なんだ。銀座で交際費を派手につかえるような会社とちがって、昼食も向いのオデン屋から定食を取って経理の女の子と半分ずつ分けあってるような、そんな内情でねえ。今度の商談がまとまらんことには、社員の給料はもちろん、銀行の取引だって停止されかねない有様。そのうえ家内がひどい香港カゼにやられているし、子供二人に学校を休ませて看病させてるような始末。ここんところはひとつ、あんたの善意にすがって何とか原価で——」
「それはお気の毒ですな」
「わかってくれたか、君。ありがとう、ありがとう」
「いいです。そんなにお困りなら、お金は一銭もいりません。そのかわり、あなたのその腕にはめてらっしゃる時計ととりかえてさしあげましょう」
「えっ？　この時計と——」
「どうです」
「冗談じゃないぜ、君。こいつは八十万もする特別製のオーディマ・ピゲだよ。たかが三万円の切符なんかとかえられるもんか」
「たかが三万とおっしゃいましたね」
「いや、その、これは家内が誕生日におくってくれた記念品で、手放すわけにはいかん。いま現金は手もとに二万円しかないんだが、これで勘弁してくれんか」
「お断わりしますよ。もう一度カウンターで当ってみたらいいでしょう」
「畜生！」
大男は憎悪に満ちた目で一郎をにらみつけた。そして、額の青筋を引きつらせながら内ポケットから蛙の腹のように札束でふくらんだ黒革の大型財布をとり出し、一万円札を三枚引き抜くと、一郎の手に叩きつけるように押しつけた。
「切符をよこせ」
「お願いします、と言うべきじゃないですかな」
「お願いする！」
「ではこれでどうぞ。お達者で」
「非国民！」

大男は吐きすてるように一郎をののしると、カバンをかかえてカウンターの方へ駆け出して行った。
「さて、もう一枚と」
一郎があたりを見回す間もなく、背後から声がかかった。鼻にかかった色っぽい女の声である。
「ねえ、切符屋さん」
一郎がふり返ると、髪を金色に脱色した少女が手に変った形のバッグをさげて立っている。
ビロードのパンタロン・スーツに、インディアンふうのヘア・バンド、三重にさげた長いネックレス、栗まんじゅうに似た先の丸い靴など、博多じゃめずらしい突飛なスタイルだ。
「切符屋さんって、ぼくのことかい？」
「そう。だって、見てたわよ、今の」
「なるほど」
「あなた、あたしのこと知ってる？」
「さあ。どちらさまで」
「失礼ね」
その女はつけまつ毛をバサッと音のしそうな感じで開閉すると、
「女と味噌漬に出てる花野すみれよ。びっくりしたでしょう」
「いいえ」
「あんた、ばかね」
花野すみれと名乗った女は、ポケットからサインペンを出すと、バッグからとり出した手帳に素早く呪文のような渦巻を書いて一郎に押しつけた。
「これ、なんです」
「あたしのサインよ」
「これが」
「あげるわ、それ。勉強机の前にでも張っといてよ」
「どうも」
「かわりに東京までの切符、一枚ゆずって」
「はあ？」
「今夜、リハーサルに立ち会わないと、演出家がうるさいのよ。なにがなんでも乗りたいの。でないと番組の制作上、大変こまることになるわ。さあ、早く。一万四千円でしょ？」
「早くって、ぼくはまだあなたに売るとは言っていませんが」
「だって、テレビよ。テレビの番組におくれちゃうのよ。わかってんの？」
「そんなこと、ぼくの知ったことじゃない」
「呆れた。女と味噌漬よ。見たことあるの、あんた」
「ええ。面白いですね、あれ。ぼくはあの中に出てくるおチャッピイな妹芸者が大好きで」

「だったらゆずって」
「花野すみれさんって、どの役やってるの」
「どの役って、ほら、あの中で煙草屋の——」
「娘かな?」
「娘の友達のさ、その子の家にいるお手伝いさんが電話に出るでしょ、その電話の向うできこえる声——」
「声に出てるのか」
「あわてないでよ。その声の主が、そもそも東北から出てきたおっ母さんで、とっても可哀そうなのね。つまり——」
「もういい。はい、切符。二万円にまけておく」
「一万五千円にして」
「二万円。だめならサヨナラ、サヨナラ、サヨナラ」
「もう一枚サインしてあげるから」
「だめ」
「口惜しい」
テレビ女優は歯ぎしりしながら一万円札を二枚、一郎に投げつけた。
テレビ女優に二枚目の切符を売りつけた一郎は、搭乗案内のアナウンスがあると、落着いて8番ゲイトから東京行の日航機に乗り込んだ。
十四のAという席に腰をおろすと、おもむろにさっきの一万円札をポケットからとり出し、ていねいにたたんで財布にしまう。これが東京での取材費なのだ。

エンジンが始動して、滑走路に出ると、ジェット機はするすると加速して急角度に上昇しはじめた。
傾いた翼の下に福岡の夜景が広がり、天神あたりのアリのような車のライトも見える。
〈忠さん、ヤギさんたちは今ごろ——〉
一郎はちょっと鼻の上にしわを寄せて、小さくなって行く眼下の街を眺めた。
「失礼」
やや感傷的になっている一郎の耳に、男の声が響いた。
「ちょっと座席の下にカバンをおかせてください」
ひげを生やした精悍な顔立ちの男だった。ちょっと老けて見えるが、たぶん三十歳前後にちがいない。ひげを取ってしまえば、案外無邪気な若者の顔が現われるのではないかと一郎は思った。
「大事なものがはいっているのでね」
その男は、シートの下にカバンを押し込むと、ほっとしたように坐り直した。
「混んでますね」
と、一郎は言った。
「うん」
男はうなずいて、
「ところで、トイレはどこでしょうか」
「あっちの方にあるはずですよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com